

## 2019 年度新北西太平洋鯨類科学調査(NEWREP-NP)

－沖合調査における目視専門船の入港について－

2019 年 6 月 26 日

指定鯨類科学調査法人 日本鯨類研究所

### 1. はじめに

日本政府は 2016 年 11 月に、新北西太平洋鯨類科学調査計画案(NEWREP-NP：ニューレップエヌピー)を策定して、国際捕鯨委員会科学委員会 (IWC/SC) に提出しました。本計画案は、日本沿岸域におけるミンククジラのより精緻な捕獲枠算出と、沖合におけるイワシクジラの妥当な捕獲枠算出に必要な情報を収集することを目的としており、その後、IWC/SC によるレビューを受けた上で、2017 年 6 月に最終化され、同年より開始されました。NEWREP-NP は、沖合調査(本調査)と沿岸域調査から構成されており、日本鯨類研究所は沖合調査の調査実施主体となっています。日本政府による IWC 脱退ならびに本年 7 月 1 日の商業捕鯨再開の決断に伴い、NEWREP-NP としての活動は、6 月 30 日で最後となります。

### 2. 調査の概要

勇新丸及び第三勇新丸は 5 月 10 日に下関港を出港して 6 月 8 日に同港へ帰港、第二勇新丸は 5 月 11 日に塩釜港より出港して 6 月 26 日に同港へ帰港、それぞれ IWC ガイドラインに則った目視調査(資源量推定のための目視調査)に加え、非致命的調査(自然標識撮影(注1)、バイオプシー(皮膚標本採取(注2))、衛星標識装着)を実施しました。調査海域は、北緯 35 度以北、日本沿岸から東経 150 度までの北西太平洋(IWC 管理海区の 7WR 及び 7E 海区)の一部海域及び北緯 41 度以南、日本海の一部海域(同 6E 海区)(図 1)です。

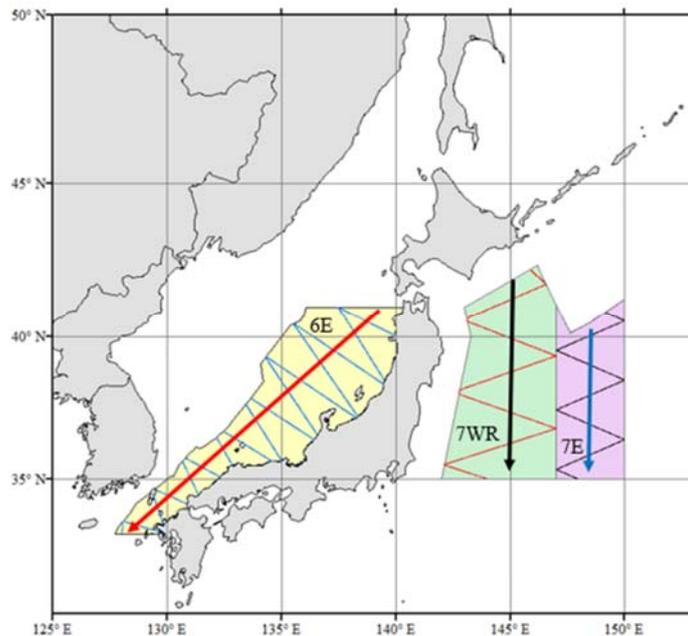


図 1. 2019 年 NEWREP-NP における目視専門船の調査海域。勇新丸は 7WR、第二勇新丸は 6E 海区、第三勇新丸は 7E 海区を調査しました(矢印は調査した方向を示す)。

### 3. 調査団の編成

#### 3.1. 調査実施機関

指定鯨類科学調査法人 日本鯨類研究所

#### 3.2. 調査船と乗組員数、計 56 名

目視専門船 勇新丸 (724 トン 葛西 英則 船長以下 19 名)

目視専門船 第二勇新丸 (747 トン 大越 親正 船長以下 19 名)

目視採集船 第三勇新丸 (742 トン 阿部 敦男 船長以下 18 名)

#### 3.3. 調査員

勝俣 太貴 (日本鯨類研究所 調査研究部観測調査研究室研究員) 他 5 名

## 4. 主な結果

### 目視調査

総探索距離 3,926 海里 (約 7,270km) の探索により、シロナガスクジラやナガスクジラをはじめとしたヒゲクジラ亜目 6 種およびマッコウクジラ、シャチなどのハクジラ亜目 2 種の発見情報を収集した。最も発見群の多かった鯨種は、マッコウクジラ (95 群 259 頭) であり、次いでニタリクジラ (48 群 61 頭)、ザトウクジラ (40 群 54 頭)、ミンククジラ (40 群 46 頭)、ナガスクジラ (23 群 37 頭)、イワシクジラ (8 群 13 頭)、シャチ (7 群 41 頭) の順であった。

### 各実験結果

シロナガスクジラ 5 個体、ザトウクジラ 4 個体、シャチ 7 個体の自然標識を撮影した。バイオプシーは、シロナガスクジラ 4 個体、ナガスクジラ 4 個体、イワシクジラ 2 個体、ザトウクジラ 3 個体、ミンククジラ 1 個体、シャチ 1 個体から標本を採取した。衛星標識については、シロナガスクジラ 1 個体、ナガスクジラ 1 個体、イワシクジラ 2 個体へそれぞれ装着を行った。

### まとめ

今期調査で得られたデータ及び標本は、今後、国内外の研究機関との共同研究により分析及び解析が行われ、鯨類資源に関する研究の進展に寄与することが期待される。研究成果については、詳細を来年の IWC/SC においても報告し、関連学会などで発表していく予定である。

(注 1) 鯨の個体識別が可能となる外見上の特徴 (模様、ヒレの形状、傷跡等) を写真に記録するもの。

(注 2) DNA 等を分析するため、鯨の表皮の一部を採取するもの。

以上